

中学校でのキャリア教育



現在、キャリア教育では、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と各学校段階を通じた、組織的・体系的なキャリア教育が求められている。2011年度7・8月号の第2回は「大学でのキャリア教育」を取り上げ、3・4回は高校の事例を紹介した。今回は、高校の前段階となる中学校でのキャリア教育を紹介する。

育を紹介する。

まず、仙台市教育委員会「仙台自分づくり教育」の内容を紹介し、次に、国立教育政策研究所藤田晃之総括研究官に、中学校のキャリア教育の現状と課題、中学校のキャリア教育を踏まえて高校でやるべきことについて、話を伺った。

「仙台自分づくり教育」を策定 子どもにわかりやすい5つの力に整理 市内全中学校で職場体験活動を実施

宮城県仙台市教育委員会では、2006年に「仙台自分づくり教育」を策定し、「児童生徒一人一人が、確かな学力の向上を図るとともに、人とのかかわりを大切にしながら望ましい勤労観・職業観、自立する力をはぐくみ、社会人としてより充実した生き方を切り拓いていくこと」を目的とした取り組みを実施している。

「仙台自分づくり教育」の中学校での取り組みについて、仙台市教育局学校教育課確かな学力育成室の藤森幸主幹と、小田暁指導主事に話を伺った。

仙台市教育委員会がバックアップし 市立全中学校で3日以上職場体験を実施

「仙台自分づくり教育」を策定するきっかけは、2004年1月に文部科学省から「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」報告書が出され、学校現場における「キャリア教育」推進の基本的な考え方が示されたことによる。これを受けて、2005年度には仙台市立寺岡中学校が文部科学省のキャリア教育実践推進校の指定を受け、5日間の職場体験活動を実施した。そして翌2006年度、仙台市は「仙台自分づくり教育」を策定し、「学校教育全体で『社会的・職業的に自立した大人を育てる』ことを目指す」方針を決めた。

具体的には、2006年度、仙台市の5つの行政区から各1校、これに寺岡中学校を加えた6校の2年生が、5日間の職場体験活動を実施した。2007年度には33校が5日間の

<図表1>仙台自分づくり教育で育てたい力

育てたい能力や態度	育てたい能力や態度の具体的な視点
かかわる力	<input type="checkbox"/> 他人のよさや個性を理解できる力
	<input type="checkbox"/> 考えや気持ちを伝え合い協力できる力
	<input type="checkbox"/> 人や地域を大切にできる力
いかす力	<input type="checkbox"/> 調べる力
	<input type="checkbox"/> 働くことの意味を考える力
	<input type="checkbox"/> 情報を生かす力
みとおす力	<input type="checkbox"/> 将来をみとおす力
	<input type="checkbox"/> 物事を見分ける力
	<input type="checkbox"/> 興味や関心をもち学ぶ意味を理解できる力
みつめる力	<input type="checkbox"/> 自分のよさや他者との違いを理解できる力
	<input type="checkbox"/> 自分の役割が分かる力
	<input type="checkbox"/> 忍耐力やストレスをコントロールする力
うごく力	<input type="checkbox"/> 何事もやり通す力
	<input type="checkbox"/> ものごとを評価し、改善につなげる力
	<input type="checkbox"/> 歩み出し積極的に挑戦する力

※ 出典：仙台市教育委員会「仙台自分づくり教育」推進の手引き（改訂版）より 平成22年3月31日発行

職場体験活動、2009年度には全ての市立中学校で3日間以上の職場体験活動を実施するようになり、現在、職場体験活動は中学校での自分づくり教育の大きな柱となっている。

そのほか、2007年度には「自分づくり教育研究会」が設置されて、「自分づくり教育」の理論的な検討が始まった。さらに、2008年には市民による「自分づくり教育応援団」が発足。東北大学教授や、東北楽天ゴールデンイーグルスをはじめとする地元プロスポーツの選手、地元企業等が応援団となっている（2011年8月現在17団体2,600名）。

このように着々と取り組みが拡大し、支援や効果検証の体制づくりが進んだ理由について、藤森主幹は「教育委員会主導で進め、市教委によるバックアップ体制を整え、充実させてきたのが大きな要因だと思います。教育委員会は早い段階で、いずれ全ての学校で3日以上、さらには5日の職場体験活動を導入する方針を明言したため、学校は心構えをすることができたと考えています」と語る。

また、近年よく言われている「子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に将来との関係で意義が見出せ

<図表 2> 仙台市立柳生中学校 2011 年度 総合的な学習の時間 年間予定表 第2学年

段階	回	ねらい (身につけさせたい考え方)	活動内容	スキル (身につけさせたい学び方)	教科との関連	
A 課題設定の段階	1 計画準備	1	・ 昨年の学習を振り返ろう ・ 1 年間の見通しをもとう	ガイダンス (学年集会)	・ 学習の見通しをもつ力	社会：第1次産業について 国語：手紙の書き方 国語：レポートの書き方
	2 課題設定準備 (民泊体験計画)	2	・ 働くことと地域・社会のつながりに目を向けよう	民泊体験準備 (活動マナー)	・ 一般社会で通用するマナー ・ 人と接するときの正しい言葉遣い	
		3		民泊体験事前指導 まとめについて	・ 質問事項を検討、整理する力	
		4		民泊体験	・ 話の聞き方 ・ インタビューの仕方 ・ メモのとり方	
		5		民泊体験のまとめ① (お礼状)	・ お礼状の書き方	
		6		民泊体験のまとめ② (新聞作成)	・ 新聞の書き方	
		7		民泊体験のまとめ③ (新聞作成)	・ 集めた情報をまとめる力、分析、 考察する力	
		8		民泊体験のまとめ④ (新聞作成)		
		9		民泊体験のまとめ⑤ (新聞作成)		
		10		民泊体験発表会	・ わかりやすい話し方	

※ 年間予定表から第10回までの内容を編集部で抜粋

ずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しない」状況について、仙台市の生活・学習状況調査でも「将来のことを考えると楽しい気持ちになる」と答える生徒は学年が高くなるにつれ少なくなり、低学年でも「自分の良いところがわからない」という児童が増えるという結果が出ていた。「これらの結果から、将来に夢や目標を持たせ、学校での勉強は将来いろいろところで役に立つことを伝える必要があるとの問題意識を市も持っていたことが、『仙台自分づくり教育』の推進につながりました」(小田指導主事)

**子どもにもわかる平易な言葉で育てる力を表現
各校が重点項目を決めて取り組むことを推奨**

では、「仙台自分づくり教育」を通して育てる「社会的・職業的に自立した大人」とは、どんな大人なのか。「仙台自分づくり教育」では、文部科学省が定めた「基礎的・汎用的能力」に代表されるような力を、独自に「かかわる力」「いかす力」「みとおす力」「みつめる力」「うごく力」の5つに整理した<図表1>。

「ひらがなを使った簡単な言葉にしたのは、大人だけでなく、子どもにもわかりやすく伝えるためです。『かかわる力』は、ヒトやモノ、コトに積極的にかかわる力、『うごく力』は積極的に行動して、振り返る力。『みとおす力』は、先を見通しながら計画的に物事を進める態度、『いかす力』は情報を生かす力を指します。情報といってもインターネットなどから得られる情報だけでなく、先生や先輩、両親からのアドバイスなど、外から入ってくる全ての情報を生かすと

いう意味です。そして『みつめる力』には2つの意味があり、1つは自分を見つめて自己肯定感を高めること、もう1つはさまざまなストレスを自分の中で消化して乗り越えていく力、すなわちストレスをコントロールする力を指しています」(小田指導主事)

また藤森主幹は、「5つの力は、職業人として必要な力に偏るものではなく、社会的自立を目指した生き方教育をしようという視点に立って決めました」と語る。

「自分づくり教育」の特徴は、5つの力を全ての学校で満遍なく育てるのではなく、各学校や各学年で重点的に育てる力を決めて取り組むことを推奨している点である。「全ての力を育てようとする、結局どの力も育たなかったということになりかねません。仙台市としては、まずは『かかわる力』を育てるという方向を打ち出しましたが、各学校で生徒の状況を把握し、『うちの学校はこれ』という意識を持つことが重要です。これは、学校ごとの特徴を打ち出すことにもつながります」と藤森主幹は説明する。小田指導主事も「重点的に育てる力を決めると、『みつめる力』であれば、各教科で生徒に自信を持たせるような支援や、声かけを行うようになるなど、教員の指導の在り方も変わってきます」と言う。

**全ての教育活動と育てたい力との関連を洗い出し
3年間の年間指導計画を作成**

では、仙台市内の中学校では実際にどのような取り組みを行っているのだろうか。

<図表3> 仙台市立西山中学校 2011年度 自分づくり教育 年間指導計画表

		4月	5月	6月	7月	8・9月	10月
学級活動	1年	・ネームゲーム ・中学生の学習	・ブラインドウォーク	・将来の夢と希望		・ボランティアの意義 ・月世界	・マイイメージ ・働く人々の仕事内容
	2年	・気になる自画像 ・2年生の勉強	・私が学校に行く理由 ・働くということ	・私の発達曲線 ・自分を知る		・職場体験に向けて	
	3年	・3年生としての学習	・進路を考える	・私の一番大切な物 ・進路フォーラム	・なぜ、高校に進むのか	・私のしたい10のこと ・エコグラム	・私のものさし ・進路の再確認
総合的な学習の時間	1年	校外学習に向けて	校外学習のまとめ	地域学習を通じたスキル学習（～11月まで）			
	2年	野外活動に向けて	野外活動のまとめ	話すこと・聞くこと・マナーの講習（5日間の職場体験にむけて）			職場体験
	3年	修学旅行に向けて	修学旅行のまとめ	「自分史」づくり			学級ディベード（～2月まで）
道徳	1年	礼儀（2-1）	自主自律（1-3）	反省と向上（1-5）	勤労奉仕（4-5）	望ましい生活習慣（1-1） 強い意志（1-2）	望ましい生活習慣（1-1） 役割の自覚（4-1）
	2年	望ましい生活習慣（1-1） 思いやり（2-1）		反省と向上（1-5）	自主自律（1-3）	礼儀（2-1） 集団生活の向上（4-1）	
	3年	強い意志（1-2）	反省と向上（1-5）	勤労奉仕（4-5） 集団生活の向上（4-1） 自主自律（1-3）			自主自律（1-3）
体験的な学習	1年		校外学習				
	2年		野外活動（農作業体験）				職場体験（5日間）
	3年		修学旅行（起業家訪問）			1日体験入学	
各教科	国語	・いろいろ情報を集める、分かりやすく話そう ・（調べて報告）、意見を書く ・プレゼンしよう・効果的なスピーチ			音楽	・合唱、アンサンブル活動（かかわる力）	
	社会	（少人数による調べ学習・資料の選択や活用） ・現代社会と私たちの生活、国民生活と経済、現代の民主政治とこれらの社会			保健	・集団行動	
	数学	（データ処理） ・数と式計算			技家	・情報とコンピュータ ・生活と自立と衣食住、家族と家庭生活	
	理科	（観察・実験での情報の検索・実験・データ処理） （見通しをもった実験）			美術	・主題の発想・表現	
	英語	・コミュニケーションを重視した授業					

※出典：『中等教育資料』平成23年10月号15ページ表2より、編集部にて10月の予定までを抜粋

柳生中学校は、地域や産業界との積極的な連携・協力体制を確立し、「自分づくり教育で育む力」と教科との関連を明確にした3年間の年間指導計画を作成した。同校の3年間の流れを追うと、1年生では、将来の生き方についてライフプランを作成した後、地域の社会人による職業講話の聴講、続いてグループごとに「職場訪問」をしてインタビューを実施している。2年生では、春に農家や水産業を営む家に1泊2日で民泊<図表2>。秋に、地域の事業所で5日間の職場体験を行う。職場体験後の発表会は1年生と合同で行うことで、相互に活動に対する意識を高め合う。3年生ではこれまでの経験を踏まえて、修学旅行で主に首都圏の企業訪問をし、インタビューを行う。そして3年間のまとめの後、1年生のときに作成したライフプランを見直し、発表会を行っている。

「他の多くの中学校でも、2年生の春に地元の農家等で就労体験、2年生の秋は地元の製造業やサービス業の事業所で職場体験、3年生で企業訪問を実施しています。これにはさまざまな職業を体験することと、段階を追って職業観・勤労観を高めていくという2つの目的があります。どちらを主にするかは学校によって異なりますが、何よりも働く体験をすること、そして感じる事が大切です」（藤森主幹）

また、柳生中学校では総合的な学習の時間の年間予定表に「身につけさせたい学び方」や「教科との関連」を併記

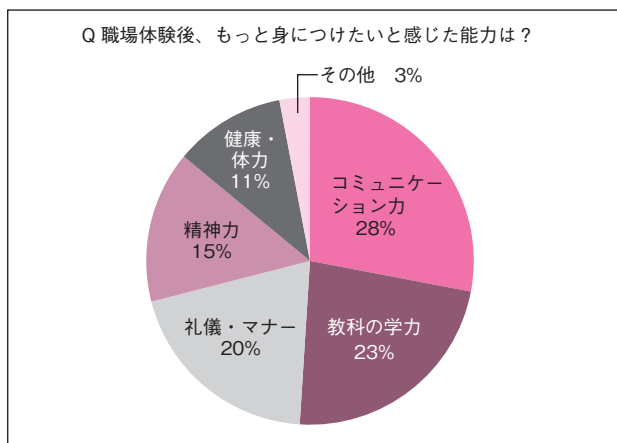
し、教育効果を高めている。「例えば、マナーは道徳で、お礼状の書き方は国語の手紙の書き方の単元で扱えます。国語の時間に『職場体験の後に実際にお礼状を書くよ』と生徒に伝えるなど、教員が『自分づくり教育』を意識しながら授業を行うだけで、子どもたちの授業への取り組み方も変わってきます。このように詳細な計画を作成するのは大変だと思われるかもしれませんが、柳生中学校も最初から年間予定表があったのではなく、活動しながら計画表を作っていました」（藤森主幹）

「教科の中に位置づけることは、今後さらに必要になる」と、藤森主幹は指摘する。というのも、2012年度から中学校では新学習指導要領が全面実施されるが、総合的な学習の時間は、3年間で210～335の授業時数が190時数へと減少するからである。「職場体験の充実度は、事前・事後指導の充実度に左右されます。従って、例えば総合的な学習の時間に実際に礼状を書く時間がとれなければ、国語の単元と関連づけて時間を生み出す工夫も必要になってきます」（藤森主幹）

**職場体験活動報告会は「鮭方式」
母校の小学校で実施**

西山中学校でも、学活や教科、総合的な学習の時間などの内容と「自分づくり教育」との関係を整理した年間指導

<図表4>仙台自分づくり教育の教育的効果



計画表を作成<図表3>。さらに、職場体験活動の事前学習と事後学習の充実と、同校の学校区にある4つの小学校と連携し、先進的な取り組みを行っている。例えば2年生の職場体験を前に、学級活動や総合的な学習の時間を活用して、ソーシャルスキル学習や職業講話、マナー教室などを行っている。

また、事後学習は、基本的に生徒がそれぞれの母校の小学校に行き、職場体験活動の報告会を開いている。「仙台市ではこれを『鮭方式』として推奨しています。母校の小学校での発表は、中学生にとっては後輩の前、小学校の恩師に成長した姿を見せる場となります。紙芝居にするなど小学生にわかりやすい工夫をすることで自分自身の理解も深まる効果があります。小学生には自分が将来体験することを、学習意欲も高まる効果があります」(小田指導主事)

なお、西山中学校ではほかに、自分史つくりやディベート、アントレプレナー教育なども行っている。

追跡調査の結果、卒業後時間が経つほど5日間の職場体験活動が生きてくる

「仙台自分づくり教育」の効果については、2009年度の生徒への職場体験活動後のアンケート調査によると、「この体験を通じてもっと身につけたい力」としては「コミュニケーション力」をあげる生徒が28%と最も多く、次に「教科の学力」(23%)、「礼儀・マナー」(20%)と続いている<図表4>。「教科の学力」について、「特定の教科の学力が必要だと感じるというより、保護者でも教師でもない大人から『将来のために今のうちにしっかり勉強して知識を

<図表5>自分づくり教育座談会

— 20歳になって中学校時代の5日間の職場体験を語る— から体験者のコメント(抜粋)

- ・就職活動のときに話のネタになり、面接官がとても興味を持って食いついてくれた。「仕事とは何か」「仕事のやりがいとは」といった質問にも、中学時代の職場体験で実感したことをもとにしっかり答えることができた。体験がなければわからなかつただろう。(専門学校生)
- ・5日間あると興味のない職場であっても、仕事とはこういうものだとか、社会とはこういうものだとかを考えることができる。(大学生)
- ・1年間のときの1日体験では「楽しかった」「すごかった」「疲れた」で終わっていた。5日間体験して、4日目頃に「体力的に辛い」「つまらない」「帰りたい」などと思ったが、5日目に責任のある仕事を任された。5日だからこそ、大人と同じような大変さを味わうことができるのだと思う。日を重ねるごとに自分からやることを見つけて大人にほめられたことが印象に残っている。(大学生)

広げておいたほうがいい』といった言葉をかけられることで、勉強が大切だと感じるようです」(藤森主幹)

また、仙台市では、2009年度に「自分づくり教育調査研究部会」を立ち上げ、18歳の追跡調査を開始した。2011年には、2005年に初めて5日間の職場体験活動を体験した寺岡中学校の卒業生や、体験していない卒業生も含めた20歳のアンケート調査と座談会を実施した。

その結果、中学時代の職場体験活動が「役立った」と感じる割合、さらに1～3日間と5日間行った生徒の比較では、職場体験活動直後より18歳、18歳より20歳で「役立った」と答える割合が高くなった。つまり、年齢を重ねるにつれ、1～3日間で体験した生徒より5日間で体験した生徒のほうが「役立った」と答える割合が高いという結果が出ている。今後、20歳、25歳の追跡調査も行う予定だ。

「職業選択をより具体的に意識する時期になって、中学校での体験や感じたことが生きてくるようです<図表5>。1～3日間では『お客様』で終わってしまっていますが、5日間であれば、疲れが出てくる4日目になると『つらい』『休みたい』などと感じ、仕事の大変さを身をもって体験します。だからこそ5日目の職場体験活動を終わると仕事をやり通した自信も出てきます。保護者への尊敬の念が生まれたり、保護者との会話が増えたりもしています。4日目になって初めてある程度責任のある仕事を任されて嬉しかったことを、20歳になっても覚えていると回答する生徒もいました。ですから短期的な視野で『効果が低い』『3日で十分』と言うのではなく、長期的に見る必要があると思います」(藤森主幹)

キャリア教育は多様な教育活動の中で既に実施 学校の教育活動をキャリア教育の視点で見直すことからスタート

—— 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター 藤田晃之 総括研究官に聞く

ここでは国立教育政策研究所生活指導研究センターの藤田晃之総括研究官に、中学校でのキャリア教育の位置づけや現状についての総括的な話と、キャリア教育を行うポイントや、高校が中学校との連携を考える際、どのようなことから始めればよいかについて伺った。

中学校では職場体験活動の実施率が97% 一方で、「キャリア教育=職場体験活動」が課題

——まず、中学校でのキャリア教育の現状を教えてください。

文部科学省が2005年度から2008年度までの4年間、中学校において5日間以上の職場体験を行う「キャリア・スタート・ウィーク・キャンペーン」を展開したこともあり、2010年度は、中学校での職場体験の実施状況は97%を超えました^(注)。実施日数も全国の6割以上の中学校が3日以上行っています。中学校は高校と違って全員参加型が多いため、体験する生徒についても6割以上が3日以上職場体験活動を行っていると思えます。

これは素晴らしいことである反面、中学校でのキャリア教育が職場体験活動に集約されている現状があり、キャリア教育が教育活動全体を通して実践されるという理念が薄くなっている感があります。そもそもキャリア教育は、小学校、中学校、高校、大学の全ての教育活動を通して行うものです。しかし現在、どの段階でも、さまざまな活動がキャリア教育という視点で一貫性をもって組み立てられているとは言いがたい状況です。

——具体的にはどのような状況でしょうか。

例えば、高校ではホームルーム、中学校では学級活動の時間を通して、生徒は異なる意見の調整や妥協をしながら集団としての意見をまとめるなどの経験を積んでいます。しかしそれが「基礎的・汎用的能力」の中の「人間関係形成・社会形成能力」につながるという意識を持つ

ている学校は多くありません。

総合的な学習の時間についても、自己の生き方を考えることができるようにすることを目的とした探究的な活動をしている学校は多くあります。また、中学校の道徳では、勤労の尊さや意義の理解、それぞれの個性や立場の尊重、自己の役割と責任の自覚などについて考えたり、社会科では、労働基本法や労働三権を学んだり、技術・家庭科では男女共同やライフ・ワーク・バランスなどを学んだりするなど、キャリア教育の要素は多くあります。



藤田晃之総括研究員

このように教育活動の中にキャリア教育の要素はあるのですが、それが意識されていない。教育活動をキャリア教育と関連づけながら3年間を見通すという意識が少ないのが現状です。

自校の現状と目標の「差」を 明らかにすることからスタート

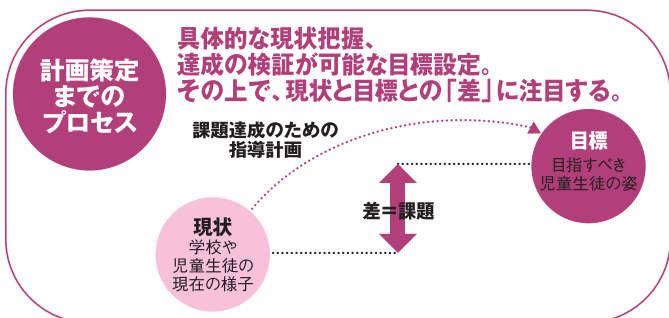
——中学校も職場体験活動の実施率が高いとはいえ、課題があることがわかりました。では、これから教育活動をキャリア教育と関連づけようとした場合、何から始めればよいのでしょうか。

キャリア教育に限らず、よくPDCAサイクルをまわすことが大切だと言います。その第一がP (Plan)、すなわち目標と実施計画を立てることですが、そのためにはまず、現状を把握しなければなりません。その上で目標を立てて、目標と現状の差を明らかにすることがポイントです。この「差」がやるべきこと、つまり課題なのです<図表1>。

現状を的確に把握するためには目標の立て方も重要です。「たくましく未来を切り拓く力の育成」といった抽象度が高い目標でもかまいません。しかし、何ができ

(注) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「職場体験・インターンシップ実施状況等調査」より

<図表 1> 学校や児童生徒の現状を把握する



「キャリア教育を創る——学校の色を生かして実践するキャリア教育」
文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導センター 2011年11月より

ば「たくましく未来を切り拓く力」がついたのかを明確にする必要があります。その力は「自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書く」など具体的な行動目標として設定できます。目標が抽象的であれば現状との「差」は見えにくいのですが、このように具体的な行動目標であればできていること、できていないことがわかり、現状の課題が見えやすい。また、「～できる」という行動目標であれば評価しやすいという利点もあります。さらにPDCAサイクルの検証もしやすいのです。

——目標の立て方は重要ですね。

そうです。目標の抽象度が高いために、例えばほとんどの学校で実践されている職場体験活動の役割が明確になっていない面があります。「現実的探索と暫定的選択の時期」<図表 2>である中学校において、職場体験活動の目標は「ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら実社会の現実に向き合うこと」にあります。「働く人の思いを知る」という目標でもいいのですが、職場体験活動を通じて、工務店、市役所、美容室などさまざまな職場

に通底する「何」を生徒に気づかせたいかを、教師が具体的に設定することがまず重要だと思います。そうすれば、ここは職場体験活動、ここは道徳、ここは国語を通じてなど、教科との関連性も明確になります。

**教科でのキャリア教育の展開
学びの意義を伝えることや基礎的・汎用的能力の育成が求められる**

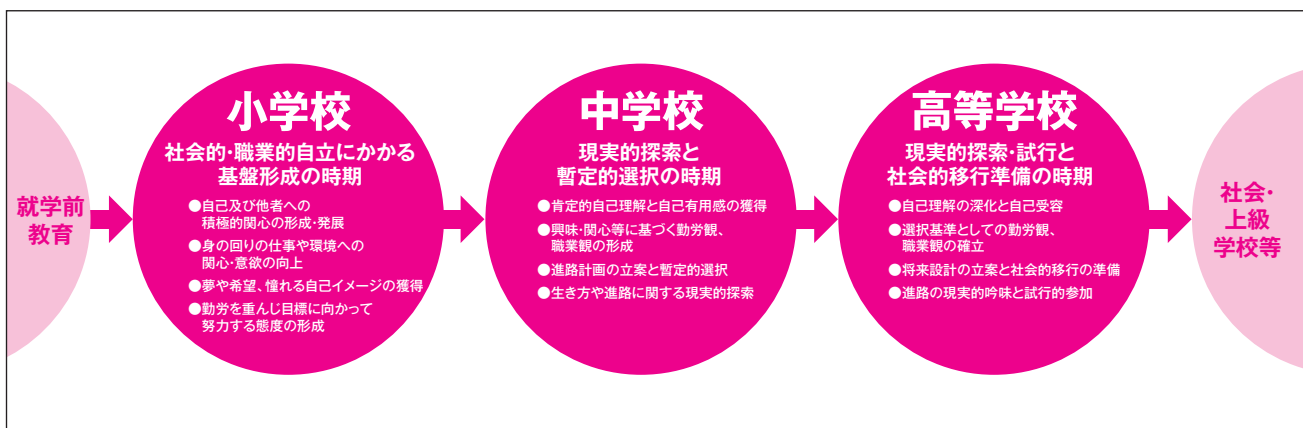
——教科で学ぶ内容が将来に結びつくことを伝えることも重要ですか。

重要です。ただ、「ここで学ぶ内容はこの仕事に役立つ」という言い方は、小学校ではよいのですが、中学校、高校と学ぶ内容の抽象度が高まるにつれ、学問を矮小化して生徒に伝えることになりかねません。

1970年代のアメリカでは「微分積分は建物等を設計するときに必要だ」などという教え方をしたのですが、そうすると、設計の道に進まないと決めたとたん、微分積分は勉強しなくていいことになってしまいます。1980年代にアメリカで学力低下が問題になった際、このようなキャリア教育が学力を低下させた一因であると批判された時期がありました。ですから、職業的な応用可能性を伝える一方で、私たちの生活そのものが、携帯電話にしても法律にしても、これまで先人が積み上げてきたあらゆる「知」の上に成り立っていることを伝える必要があります。科学技術や法体系を知らなくても生きてはいけますが、全く知らずにその上に座っているのと、ある程度中身を知って座っているのでは、物事の認識の仕方、生き方が変わってきます。

そのことに気づかせ、現在の社会を支えている学問の

<図表 2> 各学校種におけるキャリア教育推進のポイント



「キャリア教育を創る——学校の色を生かして実践するキャリア教育」文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導センター 2011年11月より

見取り図を知った上で、「自分は社会を構成するどの部分にかかわり、次の世代につなげていくか」を考へて、進路を選択させることが大切です。そしてこういう話を各教科、先生が1年間の授業のうちの10分、15分でもよいので話をしていただくとよいと思います。

——『キャリア教育の手引き』では、各教科での「基礎的・汎用的能力」の指導内容が例示されています。教科でそれらを育成するには、何から始めればよいでしょうか。

先ほど申し上げたように、目標と現状の「差」を明らかにして課題を教師全体で共有することです。取り組むべき課題が明確になれば、「英語ではこの能力をやる」とか、「理科はこの単元を使ってこの部分に働きかける」と話し合うことができます。1つの教科ですべての能力を高めようとせずに、各教科、各学年で自校の生徒の現状と目標との「差」を踏まえて、生徒にとって必要な「芽」を協力しながら伸ばしてやればよいのです。さらに、先生が授業の最後に「今日やったことは、英語の〇〇でやったことと同じだよ」と確認すれば、生徒は「基礎的・汎用的能力」を一層明確に意識することができます。

——教科間での連携は難しそうですが。

教科の壁は中学校でも高校でもありますが、先生方は生徒指導や、修学旅行や体育祭など学校行事の情報は共有し、連携・協力しますよね。キャリア教育も同じです。隣の先生と自分の授業で意識しているキャリア教育の視点や、自分がした実践の話を他の先生に話すだけでもずいぶん違います。キャリア教育を題材に、先生同士のコミュニケーションも豊かになります。実際、キャリア教育に熱心な学校の校長先生は一律に「職員室がすごくよい雰囲気になった」とおっしゃいます。

中高がお互いの教育内容を知り、補完しあう

——中学校と高校のキャリア教育の接続の課題は何でしょうか。

普通科高校でもインターンシップの実施率は年々高くなり、2010年度は73.4%になりました。しかし高校は全員参加ではないため、インターンシップを体験した生徒は17.2%にすぎません。もし高校生ほとんどがインターンシップを体験するのであれば、中学校は高校でのインターンシップを前提に、職場体験活動のねらいを設

定することもできるでしょう。しかし現状では、高校での体験率が低いこともあり、中学校と高校の違いを意識せず、職場体験に送り出している中学校が多いようです。

本来、中学校は「暫定的な選択の時期」のため、職場体験活動において生徒が就きたい職業の体験をすることが最重要課題ではありません。一方、高校は「現実的探索・試行と社会的移行準備」の時期ですから、将来就きたい職業と近い職場での体験をすることが望ましい。しかし、高校でのインターンシップ経験率が低いため、中学校でも、生徒が希望する職業が体験できる事業所で職場体験活動をさせたいと考え、教員が生徒の希望に添えるように苦勞されている面があります。

高校でのインターンシップが前提であれば、中学校では取って生徒が希望しない事業所で行ったり、男女それぞれが希望しそうな職業を意図的に体験させることで、生徒の社会や職業に対する視野を広げることができます。これは、これまで築いてきた職業や大人に対する認識をゆさぶってみることにつながります。

中学生は身体も心も大きく成長し、大人の弱さや醜さも見えてきて、大人や社会に反抗する時期です。しかし職場体験活動によって、大人や労働、社会に対するイメージが大きく変わり、大人や社会に対する謙虚な気持ちが生まれ学びの重要さに気づく、あるいは職業や社会に対する視野を広げることができます。中学校でこのような態度が身につくと、高校選択や、高校や大学での学びへの向き合い方が変わってくるのではないのでしょうか。

——高校で手始めに行うことは何でしょうか。

よく「本校にはたくさんの中学校から進学してくるので中高連携は難しい」という声を聞きます。まず、進学してくる生徒が多い中学校1～2校に対し、電話でキャリア教育の内容を問い合わせることから始めてみるはいいかがでしょうか。数分話すだけでもかなり状況を把握できます。それをもとにA4用紙1枚程度のアンケートを1年生に実施し、その結果を踏まえて、自校のキャリア教育を考えることからスタートする方策などをご検討ください。

繰り返しになりますが、中学でも高校でも、キャリア教育は、いろいろな教育活動の中ですで行われています。それをキャリア教育の視点で見直し、生徒の現状を認識し、目標との「差」を教師で共有すること。これを是非行っていただきたいと思います。